

労働後母子濃密SEX
～母子の労働と肉欲～
疲労困憊の息子が
待ち望む母親の肉体

労働後母子濃密SEX

～母子の労働と肉欲～

疲労困憊の息子が待ち望む母親の肉体

長い仕事を終え列車に揺られる僕。

今日も夕方に終わるはずだった仕事は宵を過ぎるまで長引いた。

「うふうー」

深いため息が出る。

しかしため息はマイナスのものばかりでもない。働いたという充足感が体中を駆け巡っている感じだ。

車窓を通り過ぎる夜景は、極限の疲労状態だからこそ輝いている。

そして想うのはママのこと。

ママは僕と同じように長時間体を使う過酷な仕事を頑張っている。僕たちは出勤時間も退勤時間もさほど変わらない。

僕の仕事は主にビルの窓ガラスのクリーンアップを担当する清掃業務。そ

してママの仕事は野外イベントをメインとした**キャンペーンガール**。

ママは年甲斐もなく、とは言ってもママは現在29歳で○4歳の僕の母親とは思えないくらい若いんだけど、とにかく季節に関係なく露出度の高い衣装を身に着け、人前に立っている。

種類こそ違えど、互いに“外の世界”に対して身を削っているという感じだろうか。

もうすぐ会えるね。

僕は意味もなくフーッと透明の窓ガラスに息を吹きかけてみた。瞬時に白く曇る透明ガラス。

秋夜の外は気温 10 度以下の肌寒い底冷え。左の手首に付けた赤い時計を見ると時刻は 20 時を回っている。

僕は想像出来るんだ。

今頃ママが別の列車のロングシートに座って頻繁にムッチムチの太ももを組み替えながら下半身をソワソワさせているのを。

その理由は、

ママが僕のペニスを欲しがっているから。

毎晩SEXを繰り返す僕とママの心は、いつだって繋がっている。

もうすぐ、その足は僕のものになる・・・。

最寄り駅を降りた僕は肌寒さに目もくれずほとんど駆け足で駅構内を出て歩道橋を渡り、沿線の国道沿いを歩いていく。吐く白い息は真っ暗な空へと消えていく。

ここは都会の中心部だ。

この日のように晴れた夜は歩道橋に上るとまるでちりばめられた星のような綺麗な夜景が見えるのだけど、今ばかりは周囲の景色も一切目に入らない。ここ最近は特にそうだ。

僕の心の視点は一目散に“温もり”へと向かっていた。

“温もり”

それは決してエアコンが効いている自宅のリビングのことではない。

ママのカラダのことだ。

自宅に戻った僕は玄関のタタキに靴を無造作に脱ぎ捨て、廊下へと進む。

リビングのドアを開けると、一足先に帰宅していたママが赤いソファに座っていた。

「ただいまあ！！ママ！！」

赤らむ頬。

頬だけでなく全身がまるで紅潮しそうなくらいに嬉しい。

「おかえりなさいっ！！タダシ！」

満面の笑みでママは迎えてくれた。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。